

ぼくらのビー玉コースター

図工の時間に、四人のグループでビー玉コースターを作ることになった。たかしは、さとる、やす子、よし美とのグループだ。

「さとるくん、ぼくたち二人がいれば、クラスで一番かっこいいのができるぞ。」

「そうだね。みんなをびっくりさせたいね。」

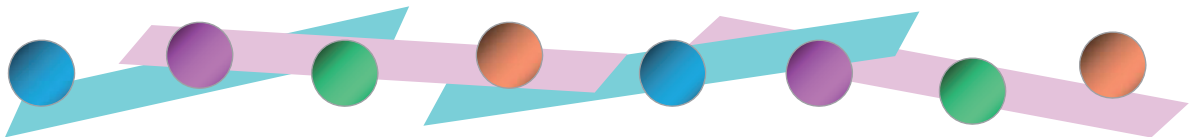
「ちょっと、わたしたちを忘れないで。よし美とわたしがいれば、ばっちりよ。」

グループで、さっそく作り始めた。

「たかしくん、コースのここは、わざと、がたがた道にしたほうがいいよね。」

「さとる、ナイスアイデア。それでいこう。ぼくは、このカーブを作るよ。」

よし美は、



「ここは、ビー玉がストーンと落ちるようにするわ。」

やす子は、

「こっちは、ぐるぐる回るようにする。」

と、みんなやる気満々で、それぞれの考えや、気づいたことから、さまざまな工夫をして作っていった。

すると、たかしがとつぜん、コースターをささえる柱を見つめながら、

「これ、コースのじゃまだよ。」

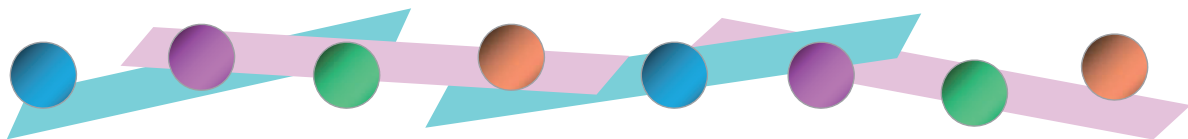
と言った。その柱は、さとりが作ったところだ。

（ぐらぐらしていたから、じょうぶにしようと思って柱をふやしたのに。……）

さとりは、柱を作った理由を口に出そうとしたが言えなかった。

「もうちょっと考えて作ってよ。お願い。」

「ごめん、ごめん、ここにコースを作るって思わなかったから。この柱は取るね。」



さとするは、いつも、自分が思っていることを言えなくて、このようになってしまう。

悲^{かな}しそうな顔をして柱^{はしら}を取^とるところを、やす子とよし美^みは見ていた。

しばらくすると、たかしがまたおこり始^{はじ}めた。

「なんで、こんなテープのはり方をするんだよ。じゃまになって、これじゃあ、速^{はや}く転^{ころ}がらないよ。速^{はや}く転^{ころ}がって急カーブになるほうがおもしろいんだからさ。」

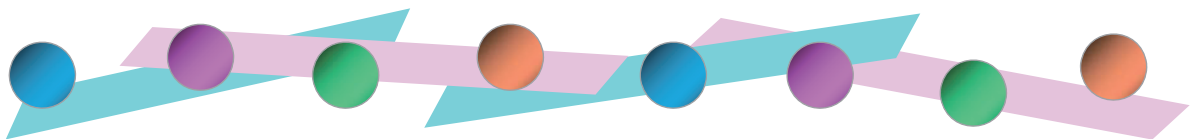
「そうしたのは、わたしだけど。ゆっくり転^{ころ}がるところがあってもいいじゃない。」

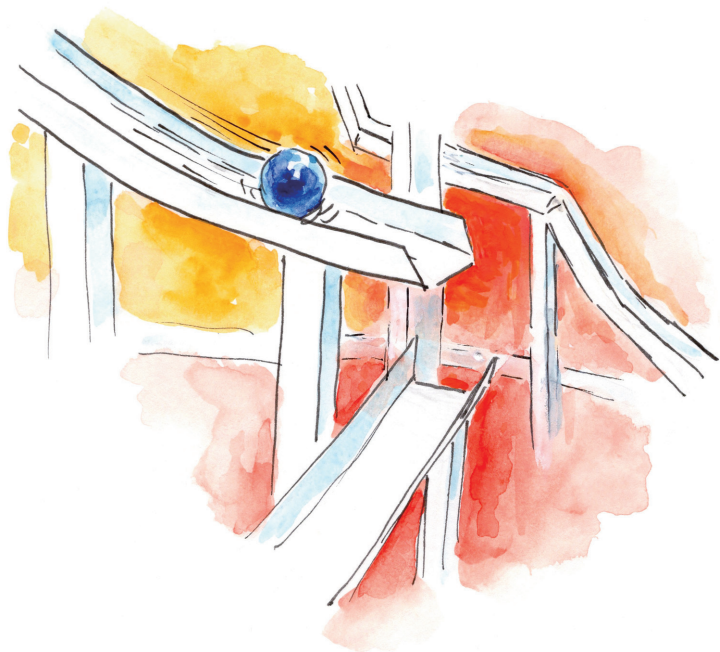
やす子は、おとした顔で答えた。

「ちがうね。だいたい、やす子はぎつなんだから、あまり手を出さないでほしいな。」

「ひどい。」

やす子はいすにすわってうつむいてしまった。こみあげてくる感^{かん}じようをこらえているようだった。たかしは、ちょっと言いすぎたことに気づいた。しばらくするとチャイムが鳴り、作^う業^{ぎょう}が進^{すす}まないまま三・四時間目の図工の時間^おが終わってしまった。





その日は、それ^いこ、四人が言葉^{ことば}をかけ合うことはなかった。
下校の^と中、たかしは、図工の時間のことを思い出して、
「どうしよう。」
と、つぶやいた。

(由良 隆 作)

